令和5年度第３回対馬市海岸漂着物対策推進協議会　議事録

（令和5年度対馬市海岸漂着物対策事業中間支援業務）

1. 会議日時：2023年（令和5年）1月31日（水）14：30～17：00
2. 会議場所：対馬市交流センター4階視聴覚室
3. 出席者：

|  |  |
| --- | --- |
| 委員 | 清野副委員長、中山委員、小島委員、川口委員、田口様(宮﨑委員代理)、犬束委員、本田委員、森委員、山下委員、村井委員 (順不同) |
| 事務局 | 【対馬市市民生活部環境政策課】  阿比留正臣課長、福島課長補佐 |
| 運営 | 【一般社団法人対馬CAPPA（以下、CAPPAと略す）】  上野芳喜、末永通尚、吉野志帆、古藤利誉、山内輝幸、波田あかね、佐々木達也 |

（欠席：橘委員、大庭委員、赤澤委員、平川委員（順不同））

1. 議事録

注：

* + 「えー、あの、えっと」などの文脈において意味をなさない単語、および、言い直した発言については記載していない。明らかな間違いのある発言や口語表現については、適宜修正している。
  + 発言者は赤文字で示し、発言の補足は（かっこ書き）にて示している。
  + 質問時の委員の挙手動作およびそれに伴う委員長の指名発言は、議事録修正時に削除している。
  + 発言の趣旨が変わらない程度に、適宜語順を入れ替えている。

事務局(福島)：皆さまこんにちは。定刻になりまして、まだ２名の方がお見えではございませんけども時間になりましたので、只今から令和５年度第３回対馬市海岸漂着物対策推進協議会を開催したいと思います。まず始めに、事務局の環境政策課長阿比留より一言ご挨拶を申し上げます。

事務局(阿比留)：皆さまこんにちは。環境政策課長の阿比留でございます。本日はお忙しい中、お集まりをいただきまして誠にありがとうございます。さて、前回のこの協議会の折にご紹介を皆様に致しましたけども、去る12月３日にですね、ラムール・エマニュエル米国大使、それからユン・ドクミン韓国大使がこの対馬の地を一緒にですね、訪問されて海ごみの状況確認、それから一緒にビーチクリーンアップもして頂いたという風な事で、その様子がですねテレビ、新聞、ネットなどで大きく取り上げられてニュースとして流れております。本当にこの対馬市にとりましても歴史的な一日になったのではないかという風に感じております。また、その時の流れでですね、その時のお話の中で昨年海ごみシンポジウムを行いまして、次は日韓シンポジウムを行いたいという風なお話もしておりましたけども、米国も入りまして日米韓の、この海ごみに関するシンポジウムを開催しようという風な事で今、準備を進めているところでございまして、在福岡の駐日米国領事館それから韓国総領事館と一緒になって今協議を進めているところでございますので、また追々皆様にですね、情報提供をさせていただいて、ぜひ。会場をですね、日米韓の三カ国の言語になりまして同時通訳が必要になってきますので、会場は福岡の国際会議場の方を利用したいという風に考えておりますので、またその時には皆さまにご案内をしたいと思いますのでどうぞよろしくお願いいたします。さて、本日は対馬市海岸漂着物対策推進行動計画のですね、見直しについてもご提案をさせていただきたいと思いますので、また皆さまの忌憚ないご意見をお聞かせいただきたいと思います。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

事務局(福島)：続きまして、副委員長挨拶。清野副委員長より、ご挨拶をいただきたいと思います。

清野副員長：皆さまこんにちは。副委員長の清野でございます。前回ですね、とても悲しい前委員長の糸山先生がご逝去されまして、そういった事で私がピンチヒッターで議長を務めさせていただきました。今回もですね、そういう形で引き続き議長という事で進めさせていただきたいと思います。そういったお気持ちをですね、受け継ぎながらこの協議会をずっと見守って下さった、前委員長のご意思を継ぎながら継承していきたいと思っております。それでは今日はですね、今14時半から１７時までちょっと長い時間となりますけれどもよろしくお願いいたします。

事務局(福島)：ありがとうございました。それでは続きまして、議事を進めさせていただきたいと思います。議長を清野副委員長様にお願いしたいと思いますので、ここからの進行をよろしくお願いいたします。

清野副員長：はい、それでは承りました。皆さまのお手元の資料を開いていただきまして、３ページの所に議事次第がございます。それに沿って進めさせていただきます。まずですね、議事の最初といたしまして、長崎県主催事業についてご報告をいただけたらと思います。

運営(吉野)：はい、ありがとうございます。私対馬CAPPAの吉野でございます。着席のまま失礼いたします。では、私の方より１月６日から１月８日に長崎県主催事業として委託していただき、運営をさせていただきました。日韓学生海ごみ交流ワークショップin釜山の事業報告をさせていただきたいと思います。まずこの事業は、本日、赤澤委員様がご欠席であられますが、長崎県県民生活部資源循環推進課の方からご依頼をいただきまして、昨年の秋口に正式に契約が成立いたしまして、準備を進めて参りました。対馬の高校生と韓国の高校生の交流を図りながら、海ごみについて考えてもらう事を趣旨とした事業となっております。短い準備期間の中ではありましたが、県、市の方々含め各方面の関係者の方に多大な協力をいただいておりまして、先日無事に実施、帰国する事が出来ました。感謝の気持ちでいっぱいです。この場をお借りいたしまして、御礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。それでは、資料に沿ってご報告させていただきます。５ページになるんですけれども、対馬からの主な参加者は、対馬高校国際文化交流科１、２年の生徒たちで、実施行程の方から申しますと、１日目、対馬市役所前に集合し比田勝港に向けバスで出発。比田勝港から釜山港へ。そして釜山港へ到着したのは18時で換金などを済ませまして、そのままバスで夕食会場へ移動し、夕食。夕食後はロッテ百貨店の展望台で釜山の夜景を観賞してホテルへ向かいました。そしてメインの２日目は、釜山の高校生と合流をいたしまして、釜山港国際展示コンベンションセンターにて、10時から15時30分までワークショップやディスカッションを行いまして、その後施設見学、買い物、夕食まで共に過ごしまして交流を深めました。３日目は早朝８時30分の船で対馬に戻り、終了となっております。参加者は対馬高校の国際文化交流科の生徒22名と、引率３名の25名。韓国側が高校生が22名、引率が１名。影島区の生涯学習課の方から４名。そして講師１名の合わせて28名。(資料の)下の枠内にあります通り、高校生は釜山市内、影島区の５つの高校からお集まりいただいております。対馬市は影島区と平成17年より姉妹縁組を結んでおりまして、コロナ化以降、久々の交流という事で良い機会になったと喜んでいただいております。そして主催の長崎県より３名、対馬市より環境政策課から２名と、対馬釜山事務所から１名。対馬CAPPAからは外部スタッフを含めて11名で運営を行いました。またこの中に記載はございませんが、今回韓国側の参加者集めでご尽力いただきました、対馬市観光交流商工部文化交流科の課長にもご来場いただいておりまして、日韓合わせて総勢70名が一堂に会し交流を図っております。では、次のページから２日目の行程を記載しておりますのでご覧ください。当日は、日本側参加者は9時20分にワークショップ会場に到着。韓国側参加者が、バスで9時40分に到着。日韓の高校生には、予め韓国語検定等の等級に配慮して振り分けた8つのグループに分かれて着席をしてもらいまして、ワークショップ開始まで交流を楽しんでもらいました。10時にワークショップが開会し、日本側参加者を代表いたしまして長崎県資源循環推進課赤澤課長より、ルールを守る事の重要性や未来の担い手である日韓の高校生がワークショップで有意義な交流を行う事で、より一層日韓友好を推進していきたいと挨拶がございました。次に、弊社代表の上野が日本、対馬の海ごみの現状について講演を行いました。スライドで対馬の海ごみの現状や取り組みについて話をした後、参加者が海ごみ問題に意識を持ち活動を拡大させていく事が今回の意義と述べました。続いて、韓国海洋大学校工科大学環境工学科のチェ・ギュヂョン教授より、韓国の海ごみの現状についてのほか、ごみの発生からマイクロプラスチック漂着となるまでの経緯や、数量等がグラフで示されたほか、環境や人体、生物に与える影響や、今後必要な対策についてご説明をしていただきました。午後からは、対馬高校国際文化交流科の生徒より、韓国側参加者に向けて対馬や対馬高校の取り組みの紹介、漂着物のトランクミュージアム®対馬版について韓国語で説明をしていただきまして、その後、グループディスカッションでは「なぜこのごみは海ごみになったのか」という事を話し合いの入り口に、日韓が協力してどんな事が出来るのか、また海ごみ解決に向けての具体的な案を話し合ってもらいました。そしてその際に出た意見をまとめ、各グループ１、２分で発表してもらいました。発表は対馬側からと韓国側から、日本語と韓国語で行っていただきました。この際に各グループから出た意見につきましては、この後８ページ(実際は12ページ)に抜粋して添付しておりますので、ぜひご覧いただければと思います。何でこのごみは海ごみになったのかという過程を考えてもらう事に意味があると思いまして話し合ってもらっていたんですけれども、やはりその後の解決方法を具体的に出す方が高校生にとって話しやすいのではという事になりまして、高校生なりの答えが出て参りました。出てきたものはちょっとありきたりなものになるのかもしれませんが、交友をしながら目的を持ち、考えてもらった時間が充実しているように伺えましたので意味があるものになったのではないかなと感じております。講評はこちら(資料)には環境政策課の阿比留課長からと記載をしておりますが、加えて韓国側代表として影島区生涯学習支援チームのコ・ヘギョン様からもご感想をいただいております。そして最後、集合写真を撮影いたしまして、ワークショップ、ディスカッションの方は終了いたしました。そしてここからはバスで30分程移動いたしまして、F1963という施設で見学を行いました。こちらは元ワイヤー工場をリノベーションして作られた施設になっておりまして、ワイヤー工場から文化ファクトリーにというテーマで、生まれ変わった施設をエコに触れてもらうという観点から行程に含めました。ここでグループ毎に過ごしてもらいました。そしてその後は、買い物の時間を設け、夕食交流会では日韓の学生がお互いの連絡先の交換をする等して最後の交流を楽しんでいました。これで２日目の行程は終了し、最終日は早朝８時30分に出港し比田勝港に到着。バスで帰路に着いております。また、(資料の)下の方にございますが、釜山港国際展示コンベンションセンターで同時開催しておりました、漂着物のトランクミュージアム®対馬版の展示会も１月7日112名、１月8日78名の方々に観覧をいただいております。説明文等を韓国語版で準備をいたしまして、弊社末永と韓国語通訳を配置いたしまして来場者に対応しております。最後に運営感想といたしまして、時期的に危惧しておりました体調不良者等が出ることがなく、何とか無事に終えることが出来て良かったと感じております。しかし、日程的に初日の夕方釜山へ到着し、最終日が早朝に帰国するという航路しかないため、中日に予定の全てを企画するしかなく、どうしてもタイトなスケジュールになってしまう事から、スタッフも含め参加者の疲労が多く出てしまう事が今後も工夫していかなければいけない部分であると考えております。日韓交流をしながら海ごみについて考えてもらうという事で、一日の中でワークショップ、ディスカッション、施設見学、買い物、交流食事会等、学びだけではなく楽しみながらでないと子供たちの心に残らないのかなという事で様々な工夫を凝らしましたが、やはり全ての行程を満足したものにするためには時間が足りず、だからと言って期間を延ばすという事は容易ではありませんので、限られた時間の中で如何に有意義な時間を過ごしてもらうかという事がこのような日韓イベントの今後のテーマでもあるかなと感じております。尚、運営期間中にアンケートを記入いただいておりまして、その集計結果も資料として添付をしております。ちょっと字が小さくて大変見え辛く申し訳ないのですが、イベントの総合的な満足度、進行のスムーズさ、スタッフの対応等の項目がありまして、青色がとても満足、赤が満足、黄色が普通、緑がやや不満という事なのですが、全体的にご満足いただいている生徒さんが多いという結果になっております。次ページでは、対馬側と韓国側の意見の抜粋という事になっております。こちらも少々分かり辛くて申し訳ないのですが、評価が５段階となっておりまして、１の方がとても満足の方になっております。数字が大きくなる毎に評価が悪くなっていくという形です。講演が楽しかったり、交流が楽しかったり、海ごみについて深く考えられてとても満足という声が多い一方で、期間が短い、買い物の時間が少ない等の意見もやはり目立ってしまいました。韓国側の意見としては、いつも対馬に来ていただいている外国語大学校の大学生とは違い、今回は日本語を学んでいない高校生の皆さんという事で、こういった形で日本の高校生と触れる機会が滅多にないという事からこのイベント自体を貴重だと楽しんでいただいたように感じております。すみません、お時間の都合上、全てをご紹介する事が出来ないので、それぞれ目を通していただきまして何かございましたらご質問をいただければと思います。駆け足で申し訳ございませんが、これで日韓学生海ごみ交流ワークショップin釜山の事業報告を終了させていただきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。今から10分程になるんですけれども、動画の方をまとめておりまして本当に抜粋、所々という事なのでちょっとにはなるんですけれども、前の方にご注目いただければと思います。

（動画視聴）

運営(吉野)：途中なんですけれども、こちらの方で映像の方を終了させていただきます。以上で報告の方を終わります。

運営(上野)：少し補足させていただきたいんですが、今回の高校生、国際交流科の生徒をですね22名連れて行って、かつての海ごみ交流in釜山と違ってですね、いくつかテーマとか事柄がありまして、まずは一般社団法人JEAN様にご理解いただきまして本物のごみを実際に持って行ったということですね。向こうの高校生に映像だけでは分からない質感とか肌感を体験してもらった事によってリアルに感じてもらったという事と、あと３つ位ありますけども、もう1つはですね高校生同士が、かつては対馬高校と向こうの大学生の外語大と交流をして釜山に入って、その後はウェブでワークショップしたんですけど、今度は同じ世代の高校生を影島区から４校、釜山市内から１校、向こうも22人位だったんですけど、高校生同士が話し合った。そしてもう一つがこれが大事なんですけど今、発表は私たちに理解できるように日本語も入れてもらったんですけど、ワークショップのグループグループは全部韓国語で皆さんやっています。韓国語でこの対馬の海ごみの状況を話してもらったり、トランクミュージアムを実際僕らがやろうと思ったんですけど高校生にやってもらった方が良いという事で、その事も私たちが話すよりは本当に韓国が大好きな高校生が韓国の高校生にメッセージを送ってもらったという事ですね。この事を大事な３つのテーマにして、そしてですね、もう一つ最後にですね、いつもこの行事を私たち何年もやってきたんですけど、日韓市民ビーチクリーンアップの時もワークショップのお時間をいただいて、答えがですね大概がマイボトルを持つとか、マイバッグを持つとか、あとSNSで拡散するという答えになってしまったので、これは小島さんにもご相談させてもらってですね。もうそろそろ違った答えが個人的にも欲しいという事で、この３つは最初から外すような感じでですね。巴山君とも話しながらそれ以外の事を出してくれと。そこの中に答えが無くても良いので、もし出てきた答えの中に何か解決策があるんじゃないかという事でここにまとめている答えが出たという事ですね。その４つ位をテーマと言いますか、私たちも折角こういうチャンスをいただいたので、今までと違った形でやっていこうという事で、この４つで。今回映像だけ見ると今までと変わっていないような感じがするんですけど、中身はそういう感じで体験させてもらったと。この事が１番大事で、今後もこういうものが続けていけたらと思っております。ありがとうございます。

清野副員長：ありがとうございました。本当に大きな進展ですね。高校生同士がまたこちらから訪ねて行って、向こうの国の言葉で交流したという事でとても心に響いたんじゃないでしょうかね。それでは委員の皆さまいかがでしょうか。

中山委員：大変素晴らしいイベントというか、交流会の報告をいただきましてありがとうございます。まず、こういった交流会を企画して運営するというのは本当に大変だと思いますし、日本国内だけじゃなくて韓国側との調整も含めて、それから学生さんを22名連れて行くというその責任感も含めてですね。本当にお疲れ様でした。こういった所に参加した22名の高校生というのは本当に環境意識も高くてやる気もあって、将来の対馬だけじゃなくて日本のこういったごみの適正化に向けて、大変貴重な人材に育つ可能性もあって、そういう人たちに教育効果は大変上げて、まあお金も掛かっているとは思うんですけど投資効果はかなり高いんじゃないかと思いますので、ぜひ継続していただきたいと思います。一点だけもし参考にしていただければと思って意見するんですけど、最後の意見表の所でもう少し深い突っ込んだ議論が出来たらという事があったと思うんですけど、それをしようと思ったらやっぱり日本とか韓国で、普段海ごみの処理じゃなくて一般の生活ごみの処理がどういう風になっているかとか、日本と韓国でのリサイクル法の位置づけ、例えば日本だったら容器法それからリサイクル法とか、プラスチック関係だったらプラスチックの資源循環促進法が出来たばっかりですけど、そういった状況をある程度インプットして韓国側はどうなってるんだよとか、そういう情報があったら比べながらじゃあこうだよねという議論がもしかしたら進むかもしれませんので、その辺もし今後ですね参考になれば。あとそういった事に関連して、韓国のごみ処理施設を見に行くとかすれば効果ももう少し上がるところもあるんじゃないかなと思います。以上です。

清野副員長：ありがとうございます。いかがでしょうか。

運営(上野)：ありがとうございます。確かにそうだと思います。そういう形も考えながらですね、当然私たちもそういう活動をしなきゃいけないんですけど、この国際交流の韓国に特化したこの学科があるという事でその生徒たちと一緒に見に行くという事で、また私たちだけの活動をしている団体だとか市役所だけじゃなしに、その子たちも一緒に含めてという事になると影島区側もそういった形で協力いただける可能性があるし、やわらかい感じで出来るかなと思っておりますので、これを機にそういう形で教育も含めてですね。私たちの視察だけじゃなしに実際そういう形で進められたらと。環境に意識の高い子たちもいたんですけど、意識の低い子たちも結構いるんですけど、こういう事をやるにつれて段々変わっていった様子も見られるんですよね。だからそういう意味では出来る子たちだけじゃなしに、まあ私も出来る子じゃなかったんですけど、一緒に連れて行ってそういうのを見せていくことによって教育にもつながっていくんじゃないかと。中山先生が仰ったように、一緒にそういうのを韓国側に提案していけたら最高だなと思っています。ありがとうございます。

清野副員長：ありがとうございました。いかがでしょうか。

小島委員：お疲れ様でした。事前に少しご相談いただいて、こちらからも助言させていただく機会があったんですけれども、韓国側の高校生がどういう子たちがいつ位に決まるかというのが、ギリギリまで分からなかった。それに対して対馬の高校生たちは、海とごみの問題もある程度知識があったり、少し温度差があったんですね。そういう中でぶっつけ本番で進めていくのはすごく大変な事だったと思います。でもすごく反応もあって良かったなと思います。どうしても日程的な時間がタイトな中で詰め込みになってしまいがちというのは致し方ない事だと思うんですけれども、せっかくコロナ化でオンラインという技法を私たちは獲得したので、もしまた今後このような事が継続的に出来るとしたら事前のやり取りをオンラインで何か、少しお互いの経験値とか何に興味があるかとか、本番の時どんな事をしたいかとかそういうのをオンラインで話しておいて、そして直接会うところにするとかやり方を工夫することで、３泊４日に延ばすのはきつくてももう少し実際に使える時間が広げられる可能性があるように思います。

清野副員長：ありがとうございます。いかがでしょうか。

運営(上野)：ありがとうございます。その通りです。今後頑張りますのでありがとうございます。

清野副員長：帰ってきた後にも、また議論の続きやりましょうとかそういう話はあるんですか。今回１月に行って、それで帰ってきた後にまた何か次オンラインで会いましょうでもいいんですけど。

運営(上野)：いいえ。それは向こう側とはないんですけど、対馬高校側とはそういう動画も持っていってやりたいなという話はやっていこうと思っています。

清野副員長：ぜひですね、こういう生徒さんが一つの民間大使みたいな形で育っていって、素晴らしい方々が対馬で人材育成もという事と、あと同世代の交流はやっぱり大事ですね。今日ご紹介があったように向こうの大学生が来てくれてこちらの高校生が迎えるという、ちょっと歳の差とかもあったと思うんですけど、本当に画期的だったと思います。他にいかがでしょうか。行政の委員さんからいかかですか。

村井委員：市民生活部の私、村井と申します。この協議会も私初めてでございまして、昨年の８月に異動になって色々あって参加できずに今日初めてで。そういう中で今、最初の上野さん、CAPPAさんの話をお聞きして一番良かったなと思うのが、やっぱり高校生同士という事と、今小島先生の方からは事前のそういう取り組みの準備に色々苦労なさったという話がありましたけれども、一つは向こうが逆に言うと知識が無くて韓国語でしか喋れない高校生、こちらからは勉強もしていて海ごみも興味があって韓国語が喋れて向こうに行って合流したと、そのギャップといいますかそういった意味ではそこは非常に逆に見ればいい所だったのかなと。違うインパクトがあって、今後は今の小島先生が仰るように改善する所は多分にあるかと思うんですけれども、そういう見方も一つはあるのかなと思ったのと、上野さんが草の根的に聞きますと20年位もうずっとシーカヤック等のエコツーリズムをやりながら観光部門をメインにやってきて、こういった海ごみを見せて良いのかとか、そういう葛藤があったという話も過去に聞きましたけれども、やっぱり両輪でやるべきだと。そういう現状を見せながら、そしてこちらでは環境とか経済とかに結びつくような事を両輪でやっていこうという話もなさっていて、そこに辿り着いたという風な事を仰っていましたので、20年間という中で、今CAPPAさんという中で引き継がれていますので、ちょっと勉強不足ですけれども、環境政策課それからCAPPAさんという流れの中でですね、これからもっともっと草の根的に現場を広めて、そしてそういう大きなシンポジウム等といったところにつなげていくという事は、一つ今ヒントとして思ったところです。すいませんとりとめのない話で。

清野副委員長：ありがとうございます。このメンバーでは、CAPPAさんだとか対馬市さんとかの努力で知っているんですけれども、もっともっと知られていいですね。これは対馬市民の方には市報とかケーブルテレビとかで、ああいう風に高校生が交流して通訳なしでやっているその辺りはどんな風に伝えていますか。

運営(上野)：対馬高校と向こうの高校との交流というのは新聞等で、ご紹介頂いたので。ただ私が先ほど付け加えさせてもらったのは、ワークショップ内の熱さというか発表の時はみんなあがってしまっていてあれなんですけど、和気あいあいというか、韓国がものすごく好きな子たちが韓国語で海の状況を話すので、私たちが間に入ってするよりは交流があって少し高校生も納得しやすかったかなという事はあまり知られていないので。そういう交流だけというのは新聞等でみなさん知っていると思います。市報等でも。

清野副委員長：ではぜひ、さっきのYouTubeの編集版でも良いと思うんですけど、やっぱりすごく大きい事だと思いますし、対馬の未来で若い人、どんな風に対馬を盛り立てていってもらうかとか、コミットしてもらうかという事が大事だと思いますし、すぐに有権者になってくるという世代になっているので彼らの雰囲気をもっと対馬の中でも共有したり、また対外的に出せるものはどんどん出していただけたらと思いました。ではまたこの話題について何かありましたら最後の方でも触れたいと思います。それでは議事を先に進めさせていただきます。（２）対馬市海岸漂着物対策推進行動計画の対策メニュー推進状況報告お願いいたします。

運営(末永)：議事２についてご説明をさせていただきます。16ページをご覧ください。この16ページの表なんですけれども、後で議事３で触れる対馬市海岸漂着物対策推進行動計画というものに則って、私どもは主要課題として回収処理の体制、それからそれにまつわる海岸の漂着物対策に係わる行動計画、それから発生抑制、それからその他のごみについて、その他の活動についてという事で、それぞれ進捗状況をチェックして行っております。その中でこのメニューですね。それぞれ最近は色々と取り組むことが増えて参りましたので、各内容毎に主だった報告がある部分に関しては抜粋して、その後のページからですね。18ページからですね。資料１から順次ご説明をさせていただきたいと思います。まずですね18ページをご覧ください。その中の主要課題として、発生抑制対策、普及啓発の部分で、時期・対象等を含む活動計画の策定という事で、今ですね毎年継続してですね。普及啓発の活動計画を立てております。ボランティア等に対して、数値目標を立てるのはいかがなものかというような事もあるんですが、積極的にですねこちらも活動をしたいという事でノルマではないんですけども、ある程度の数字を立ててやっております。その中での取り組みとして現状ですが、平成29年度よりですね一般社団法人JEAN様監修による漂着物のトランクミュージアム®対馬版を用いて普及啓発を開始いたしました。今年はですねこの事業といいますか、トランクミュージアムを見ていただいて海ごみの普及啓発という事で25件実施をさせていただきました。今後の実施の内容としてはですね、対馬海ごみ情報センターという運営しておりますホームページがございますので、そちらの方ももっと有効活用して、今はトピックスといいますか、それぞれ海岸清掃のボランティアとかですね、そういったイベント的なものを主に出しておりますので、実際に海ごみに携わっている地元の団体としてですね、ホットな情報といいますかそういったものをもっと、リアルな海ごみについての掲載をしていければと思っております。それから弊社吉野の方から話がございました、今回令和6年１月６日から８日まで対馬の高校生と韓国の高校生の交流事業というのを行いまして、ワークショップの方を今詳しく説明させていただいたんですけれども、この中にですね漂着物のトランクミュージアム®対馬版の一般展示というのをやらせていただきました。もちろん私は韓国語を話せませんので、伝えたいことは韓国の方の通訳を通してお伝えすることが出来ました。ここの場所がですね、釜山港の上の国際会議場という事でして、当初は人があまり来ないんじゃないかと正直思っておりましたが、後ろがですね釜山港がすごく見えてすごい橋があって、日本初の船に乗る前にかなりお客様というのが実は待合時間の間にご来場されたんですね。実際初めはちょっと恐る恐るといいますか、何なんだこれはというような感じで見れていたんですが、カップルとかで写真を撮られてましたので、お二人で撮りますよという事で、写真を撮ってあげたりしながら色々と海ごみの説明をさせていただきました。新婚旅行に大阪に今から向かう夫婦であったりとか、家族連れであったりとか色んな方々が、いや日本に初めて行くんですけど、コロナ明けでやっと日本に行けるんですけど、こんな事になっているんですね対馬はと。びっくりしましたと。日本てすごくきれいで海のきれいなイメージがあってこんなにごみが流れてるんですか。これ本当に対馬の海に流れて来たんですかと。そういったような意見もいただいて、ごみについて全く関心の無かった方々もですね、その後興味深くトランクミュージアムを見ていただきました。という事でやはり、本物のごみというか本物というのは強いなという事が認識出来ました。非常に小島様のご協力とか色々アドバイスがあってですね、どうやったら韓国の人に見てもらえるかというのを工夫した甲斐があったなという風に感じております。次ですね。21ページをご覧ください。これも発生抑制対策の普及啓発に付く内容でございまして、普及啓発の活動計画に基づく活動の評価という事で、次の22ページをご覧いただきたいと思うんですけど、先ほど言いましたノルマではないんですが、数値目標を考えてそれぞれこちらの方で積極的に活動をしたいというモチベーションの為にですね、あえて出しております。その表１につきましては、各メディア、媒体を活用した情報の発信という事で、これは弊社を取り上げていただいた記事というのもあるんですけれども、中々弊社の方が積極的にですね、今までマスコミにアナウンスしていないという事もございました。逆にそれに対して後ろめたい気持ちもあったりとか、地道に活動していきたいというのもありましたが、やはり今そういった事をするような事もいかがかと思いまして、今後はこちらの方にもですね積極的にやっている事を発表したいと思っているんですね。やはり色んな今、海ごみ問題というのは対馬の場合も万博とかですね色んな所で取り上げられまして、全国的になっていると思います。日経の報道とかでもかなり新聞で取り上げられていますしね。実際それに関連したかどうか分かりませんが、アメリカの駐日大使、韓国の駐日大使がお見えになったという事で、対馬自体の海ごみに対する認知といいますか、皆さん注目が集まっている時期だと思っております。ただうちみたいな何というんでしょう。地元から出身のですね、一つ一つ積み上げてきた団体からするとこの状況は非常に危機感を覚えているんですね。一過性のものにならないか。そのまままた忘れ去られないか。それが非常に怖く思っていますので、うちとしてはやはり地道に活動をするという事。海ごみをきっちり拾っていくという事。それから今やっているモニタリングの調査といったものをきっちりと内容のあるものにですね、したいという事で、こちらの委員をしていただいております清野先生、それから中山先生にも学術的な、専門的な知見に立ってですねモニタリング調査の精度を上げたいというような事で、今ご協力の依頼をしている状況でございますので来年度ですね、弊社の方でもしその事業が落札出来れば、そのような形で進めたいと思っております。それからトランクミュージアムはですね先ほど25件という事で、人数はやはり300人から566人と増えました。実際これはコロナが明けてからという事で、前回の数字というのはかなりコロナ中ででして、ほとんどイベントも出来ない状態でしたし、オンラインという事もありましてほとんどカウントが出来ないような状況でした。海岸清掃も出来ない。それからシンポジウムもオンラインでは出来ない。但し、先ほど小島委員の方からご指摘があったようにその危機的な状況の中でオンラインという、私たちは新しい武器を手に入れたんですよね。要は、時間をそれほど合わなくても実際に話し合いが出来たりですとか、そういったところもありますので、その辺の積極的な活用もやりながらですね、今回は今コロナ明けという事でこのようにやらせていただいております。４番目の日韓学生海ごみ交流ワークショップin釜山というのはこれは長崎県主催で初めて行った。先ほど議事１でご報告した内容になります。今まではですね、日韓海ごみ交流ワークショップin釜山というのは対馬市の事業としてですね、過去２回やっておりましたが、これは相手先がですね釜山外国語大学校。大学生です。しかも日本語融合コースという事で、日本語の学習をしている大学生だったんですけれども、今回はそういった意味では高校生同士の交流という事で色々ですね今、インスタのメールとかアカウントID交換とかをしながら、高校生同士で色々今後も交流を続けていくような、同世代ということもありますのでその発展も今後あるんじゃないかという風に思っております。この今、休止している対馬市の事業も継続的に再開していただければなという風に思っております。県の事業はですね、長崎県の事業ですから対馬市だけに特別に予算をというのは難しいと思いますので。色んなやっぱり海ごみで困っている離島はありますから。五島であったりもそうですし、壱岐であったりもそうですから、そういった所にも予算配分となるでしょうから、対馬市は対馬市独自でその辺もやれたら今までの積み重ねが無駄にならないんじゃないかと思いますし、やはりワークショップの内容もです。もっと充実して事前準備もきちんと出来るのではないかという風に考えております。それから次ですね。日韓市民ビーチクリーンアップというこれは、釜山外国語大学校の生徒さんと対馬高校、それから対馬の島民の方が来られる海ごみの海岸清掃なんですけども、やっと4年振りという事で300名位の方がお集まりになって拾う事が出来ました。実際その後にワークショップという事で、話し合いの方もさせていただいております。最近はワークショップの内容につきましてはかなりですね、色んなやっぱり意見も出まして、マイボトルを持とう、マイバッグを持とうとかそういう事だけではなくなってきてですね。プラスチックそのものの嫌悪感と言いますか、プラスチック製品をどう減らしたらいいのかという、どう使っていきたいのかというような具体的なところをですね、皆さん学生さんの方も考えられて深刻的に受け止めているような気はします。ただ今の現状でいうと中々それを急に明日からプラスチックをゼロにするという事は難しいという事もよく分かっていますので、自分たちがじゃあどうしたらいいのかという事を常々やっぱり考えていらっしゃると思います。その辺も色んな技術革新とかも含めてですね、情報の共有といいますか、希望が持てるような情報共有が学生とも出来れば良いかなという風に考えております。それから弊社の方で行っております環境スタディツアーという事で、今回は373名の方を受け入れる事が出来ました。これはこちらにいらっしゃいます川口委員様の方からですね、色々と高校生の修学旅行のご依頼をいただきまして受け入れをさせていただくことが出来ました。コロナのおかげといったら変ですけれども、今までは海外の方に行かれていたですね、都市部の高校生の修学旅行が国内になってやはり学習というところに重点を置いた結果、国境離島の対馬という所にターゲットが当たりといいますか、スポットが当たりですね迎えることが出来ました。これは一過性のものかと思っていたんですが何かしら継続してですね、今ずっとご依頼をいただいていますね。大阪の大手門学院高等学校様に関しましては２年連続で来ていただいておりますし、そういった継続的な事がですね、活動として大事なのではないのかなという風に思っております。次26ページですね、発生抑制対策のポイ捨て、不法投棄の対策及びそれらの防止の呼びかけという事で、今回これは日本財団の「海と日本プロジェクト・CHANGE FOR THE BLUE」の一環として海ごみ拾い箱の設置というのに協力をしました。これがちょっと不本意な部分も正直ありましてですね。本来であれば海岸に置きたかったんです。海水浴場ですね。置きたかったんですけど、以前五島の方とかでもそういうお話をお聞きしてですね、海岸にごみ拾い箱を設置して３年間ずっと毎日ごみを拾った池田さんという方のお話を聞かせていただいて良いと思ったんですけど、やっぱりNGになるんですね。理由はごみ拾い箱を誰が管理するのか。それから置いた場合に、不法投棄の良いスポットになってしまうんですね。やはり何故かというと、海岸に行ったらですね紙おむつとかそういうのが結構捨てられています。だからやはりこれも対馬市民の発生抑制の為の教育とかそういったところですね、していっても中々そういうのが無くならないというか、ポイ捨てとかですね。不法投棄とかですね。しかもそれは子供たちがやっているんじゃなくてあくまでも大人がやっているというところがありますので、そしたらどうするかというと、不法投棄場所にカメラを設置して監視して非常に厳しく取り締まる。罰金を課す。韓国の方でよくそういう話をすると必ずそういう意見が出ます。罰金を課す。取り締まる。だからやっぱりそこのところも今、環境政策課様の方で不法投棄のパトロールとかずっと継続してやられていると思うんですけど、中々24時間監視するというのも難しいですし、やはりこういった海ごみのごみ箱を設置する位のですね、皆さんのマナーというかそういう向上に努めていくにはまだまだ足りていないのかなという気がしておりますので、弊社もやはり大人の方への環境教育も含め力を入れていかないといけないのかなという気がしております。ちなみにこれは今弊社のカヤックの横の出入口の所に置いておりますので、カヤックに乗られた方で１個２個ペットボトルを拾ってきて、拾った人は捨てないという環境スタディツアーをやっておりますので、うちのお客様の中からですね捨てていっていただけるのではないかという風には思っていますけど、もっと広い市民の方に使ってもらいたいなというのはありましたので、ちょっとそれは残念に思いました。それからですね29ページの資料４ですね。こちらは今までの分で説明させていただいた４年ぶりの日韓市民ビーチクリーンアップ、それから海ごみ交流ワークショップin釜山の内容があったんですけれども、(20)23年12月３日の米国エマニュエル駐日大使と韓国のユン駐日大使が対馬を訪れて、これは大々的に放送をされました。実際にアメリカの方も海ごみについてですね非常に関心をお持ちでしたので、前政権に比べるとかなりそういったものについて関心のある今、バイデン政権という事もありますし、非常にエマニュエル駐日大使も昔から政治家としてかなり活動されてる方で有望な方だと、優秀な方だと聞いておりますので、今後そういったところも弊社の方も協力をさせていただきながらもっとアナウンスしていければなという風に考えております。それから34ページですね。回収処理方法の検討と実践という事で、これは前回、前々回も報告したと思うんですけれども、一時的にですね減少していた青色ポリタンクの漂着が、これは肌間隔なんですけれども明らかに増えているんではないかと思いました。海岸清掃をやっているこちらの立場としてですね。それで環境政策課様の方に相談をして、漁協の回収事業の際には青色ポリタンクの個数の管理、確認ということで、そちらをしていただけるようになっておりまして、弊社の方も個数を確認はしていただいております。それから先ほどの大使がお見えになった際にですね、弊社の代表の上野が、韓国のユン大使の方に青色ポリタンクが増えていると。何とかしてくれという事で伝えることが出来ておりますので、そういった意味で直接やっぱりご本人様に伝えるのが一番かと思っています。実際ビックリされていますし、韓国の養殖のりはおいしいんだけれど、この青色ポリタンクは何とかしてくれないかといった話はしておりますので、そういう機会がいただければですね具体的にターゲットというか、わかりやすいシンボルですね、ペットボトルならペットボトル。青色ポリタンクならポリタンクというのも含めて伝えていければ海ごみ全体の削減とかにつながっていくきっかけになる、考えやすいきっかけになると思っておりますのでそちらも続けていきたいと思っております。議事２の説明は以上になります。

清野副委員長：ありがとうございました。それでは委員の皆さまいかがでしょうか。たくさんのご報告がありました。いずれからでも結構です。ちょっと皆さま考えていらっしゃる間に私から。先ほど市役所の村井部長様からもありましたけれども、やっぱり地域の方、住民の方、まず対馬の方が気が付いて、色々対馬の中でも合意形成をしてというのにすごい長い時間を掛けてこられたと思うんですね。これはやっぱり本当に海ごみの事を日本で誰が声を上げるのかという時に、対馬市さんがあらゆる市役所とか議会の方とか住民とか漁師さんとかが声を上げ始めて法律が出来てみたいなところもあったと思います。質問なんですけれど、そういう年代記みたいな、年表みたいなそういうもので読みやすいものとか、公表されているものはあるんですか。対馬における海ごみの対策の歴史とか、あと合意形成とかですね。いかがでしょうか。いつもたくさんの資料をいただいているんですけど。では事務局様でも行政の方からでも。

運営(末永)：実際には資料は作ってはいるものの、きれいにまとまってはいない状態です。やはりせっかくホームページとかですね運営をしておりますし、そういったところにまとめて弊社も色んな所に説明に行く際にはパンフレット等も含めですね、冊子も作成をしたいという風に昨年から意見が出ておりまして現在制作を検討中でございます。もうしばらく経てばそういった分かりやすいものを作れるとは思うんですけれど、出来ておりません。

清野副委員長：ぜひですねさっき国際シンポジウムの話もありましたし、やはりこの海ごみの問題は国際条約で議論されていたり、国際条約のもう少し細かい計画なんかを決める時に、やはり対馬の事例というのが大切じゃないかと思うんですね。ですから今、日本語で作っておけば、翻訳は高校生さんとかも含めて色んな言語に出来る方が、人材がいるのでぜひやっぱり日本を代表する事例として対馬の苦労と丁寧な編み上げ方というのをご紹介いただけたらと思いました。それと後、日韓の事だとかそれからNGOの関わりという事でも、小島さんもし何かありましたら、そういったやっぱり20年間ということもあります。20年間以上だと思いますけども、今日のご説明、行動計画を聞かれていかがでしょうか。

小島委員：2002年って、その後にすぐ合併があって、最初まだ美津島とかあっちの方の船じゃなきゃ行けない所に漁師さんの船に乗せていただいて、もう寒くて泣きそうになりながら行って、あまりのごみにもう見なかった事にして帰りたいくらいの暗澹たる気持ちになった事が今でもすごくよく覚えているんですね。その頃はまだ、実際にその漁師さんだとか地域の方による清掃というのが島内でも各地でも行われていたんですけれども、対馬だけじゃない日本全体、世界全体の環境の問題だというような認識で動いている方はまだ地域にはいらっしゃいませんでした。それが20年近く経ってこういった人を中間支援の組織が一緒になって動けるようになってきたというのは、日本の中でも稀有な例だと思いますし、それから何といってもやっぱり現状が厳しいので大量のごみがありますし、これは韓国からだけの問題ではありませんけれども、現場に行けば誰でも分かる位これは大変な事だというのが目で見て分かる場所なんですね。だから今まで続けてきた事を大事に重ねながら発信力に今までもして来られたと思うんですけれども、つなげていく丁度そういう時期なのかなと。それで海洋ごみが国際的な課題ですけれども明らかに経済問題なので、そこの視点をしっかり押さえていかないと海ごみはグリーンウォッシュになりやすいものなので、リサイクル出来るから良いんだみたいな非常に勘違いした意見とかですね。一部の企業さんなんかも海で拾ったごみをちょっと入れたからこれは良いでしょみたいな、そういうのが非常にあるので、何が良くてこういう事は気をつけなきゃいけないみたいな事も、私たちもしっかり見る目等を養っていかなければいけないので。簡単に解決する事ではないですし、まだまだ時間は掛かる事だと思いますけれども、16ページの一覧表を見ても前年度の評価が×とか△だったのに、今年度はみんな〇になっているようなところも増えている。これだけ具体的に整理をしてこういう風にやっていこうという目標を持ってやっていくと進捗がきちんと見られるので、出来ていないところをどうしていくかというところももちろん大事なんですけれども、続けてきた事で何がどう変わったのかとか、今もっと足りないのは何なのかとかそういう事をやっていく時期になるのかなと思います。

清野副委員長：ありがとうございます。事務局さんはいかがですか。

運営(上野)：積み重ねていくことが大事だと思っています。僕個人で言ったら、ここに住んでいる者としては長い事僕自身も、先ほど村井部長の方からもご意見をいただいたんですけれども、私自身もちょっと葛藤があってですね、やっぱりあまりドライなネガティブなイメージの場所を見せたくないというのがあってずっと。その葛藤の中でやはりここまで来ると、年々今でもそうなんですけれど増えていって、またアジアの諸国の発展と共にまた増えていくというのがあってですね。まずは気づいてもらうというのが先にあって、色んな企業とかも来てもらって今現在大学関係だけじゃなく企業も来てもらって、今良い感じで整おうとしているので。それにちょっとやはり時間が掛かって、その中でもここにいらっしゃる協議会の方とかNUSの方々に協力してもらって積み上がっていって、それが結構今大事な情報になっていくのではないかと。それこそこの日本海の入口にある対馬がですね、それをまとめておられる方もこの海ごみ情報センターを見てという方もいらっしゃいますので、大学関係とか企業関係さんも。これを継続していって続けていって、更に僕らも確実性を持たせながらですね。もう少し汗をかきながら、例えば定観とかですねそういうのを考えながら今後もやっていこうと思っています。だからまずそういった意味でも記録も付けて今後も進めていきたいと思っています。

清野副委員長：ありがとうございました。今日はですね、皆さんに一言ずつはお話いただきたいと思っておりますのでどこかご意見で、特に伝えたいところがありましたらお願いいたします。いかがでしょうか。では、行政の方から順番で恐縮ですが、森様いかがでしょうか。お願いいたします。

森委員：対馬振興局の建設部管理課、森と申します。この場に座らせていただいているのはですね、本庁の赤澤課長の所の方からですね、連絡をいただいて海岸漂着物対策等推進事業というのを予算をいただいて、県が管理しているという前提が付くんですけれども、護岸とか漁港に漂着する海岸漂着物を回収して中部まで持って行くという事業をですね携わらせていただいてご準備いただいているんですけれども。言ってみたら私たちがやっている事業というのは最後の部分の実際に流れ着いたものを漁協の方の判断で回収してもらってトン袋に詰めて、置いてもらっているものをこちらが無くしていくと最後の最後の締めの所をちょっとみていただいて、3年目になりますけれども、ずっと発生抑制のところから含めてですね、そういう事をやっていただいている事を認識させていただいてますね。本当に中々減らないというか、もちろん韓国由来のとか対国由来のごみばっかりではないんですけれども、その中で今年は台風が少なくていいなだとかいう事だけの目の前の話じゃなくてですね、大元の発生抑制を考えていただいているこの協議会について本当に敬意を表しますし、継続して取り組んでいただければなと思います。感想ですけれども以上です。

清野副委員長：ありがとうございます。そういう意味では海岸とか港湾漁港の中々、一般のごみと違ったハードな自然の中にある、或いは大きい施設の関わる所に携わられているという立場からお話いただきました。実際豪雨の後とか凄まじい量が港湾漁港にも入って、産業にも影響するとか船が出れないとか様々あったと思いますし、漂着ごみも災害というレベルになっていたりすると、そういう認定を巡る手続き等もずっとしていただいたと思っております。引き続きこういった分野で市民とか住民とか、そして行政の中でも色んな立場の方がおられますのでお願いいたします。それではこの計画について大事なところですので行政の方から引き続き、では山下さんからいかがでしょうか。計画にも関わりますので。

山下委員：26ページにあります島内での発生抑制対策ですね、県所としては基本的に産廃の不法投棄対策、市の方では一般廃棄物のという業務を別れさせていただいているんですけれども、やはり色んな対策をされているんですが島内のってなった時にですね、刀の矛先がやっぱり自分に向くんですね。ですからそこも意識しながら対策というのは引き続き評価していくべきなのかなという風に考えております。以上です。

清野副委員長：ありがとうございます。時間の関係もありますが、本田さんからもいただけますか。

本田委員：私たち海上保安部は毎年ですね、厳原小学校６年生に対して、対馬CAPPAさんと一緒にですね、ごみ拾い。それから市内の依頼のあった小中学校に対しまして、出前の授業ですね、環境や安全活動に対する授業。それから６月はですね、弱年齢層を対象とした未来に残そう青い海、海上保安庁図画コンクールというものをして、海の環境に関するテーマで図画コンクールをして応募をしてもらうという活動もやっています。先ほど中々ですね、市民の方に環境に関する意識付けが出来ないという話もありましたけど、私たちはですね、小学校、中学校を対象にですね、知識を中心にですね活動しています。引き続きですねCAPPAさんと一緒に推進等を続けていきたいと思います。

清野副委員長：ありがとうございます。行政の方々は海岸であまり人が行かない所とか港湾とかと、保安調査の洋上で島みたいにたくさんある状況とか、中々特に洋上についての情報が中々無くて、漁師さんから聞いたりとか保安調査のニュースで聞いたりしているので、ぜひまた海岸に来る前の事が何かありましたら情報を提供いただけたらと思いました。

本田委員：今、漂着ごみの事が話題になっていますけど、ここの場ではですね。私たちが対応しているのは漁船の漁師さんとかが海を航行中にですね、ロープを巻いたり網を巻いたとか、それで動けなくなったら救助してというのが結構あります。

清野副委員長：ありがとうございます。それ実は結構事故が起きていたりとか、県内ではフェリーが凄まじい事故が起きているとかあるんですけれども、もうちょっと世間的にもですねそういった実害があるという事も知られていいのかなと思いましたので、またこの協議会でもですね、対馬の漁師さんを含めて、保安調査の情報を含めて、実害についても情報収集していきたいと思っております。ありがとうございます。他の委員さんいかがですか。ではもしあれでしたら先に進みましてその後にもご意見いただけたらと思います。それではですね、もう1時間過ぎておりますので、４時まで休憩という事にさせていただきたいと思います。

（休憩）

清野副委員長：それでは皆さん、残り１時間でございます。ちょっと中山先生がですね、飛行機のお時間の都合で先にという事ですので、申し訳ありませんが今までの説明とか或いは資料の方からのご発言をお願いいたします。

中山委員：２点ありまして、１点目は今までの説明いただいた中で、モニタリングの精度の向上とかデータの維持管理の話が少しあったんですけど、それについては我々学術的な立場として全面的に協力させていただこうと思いますので、ぜひお声かけいただいて使っていただければと思いますので、ぜひよろしくお願いします。そうする事が我々としても対馬に貢献出来ると思いますし、我々自身の研究テーマにもなりますのでそういったWINWIN関係を築いていただければと思っております。それから次２点目はですね、今まで説明していただいた事ではなくて今から説明があると思うんですけど、ちょっと私今から失礼するので、39ページの対馬市の行動計画の見直しの議事４という所に赤字でいくつか書いてある課題の③の回収だけでなく海ごみに付加価値をつけ、リサイクル資源として商品を生み出す仕組みを構築するというところで、これは本当に重要な課題、難しいですけれども主要な課題だと思います。それでこの付加価値というのは色んな見方があって、もちろん経済的な利益を生み出すというものもあるんですけれど、そういうところにダイレクトにつながらなくても何らか良いイメージを生み出すような付加価値というのがいくつか転がっていて、例えば対馬市は漁師さんにお願いして、網とか漁網とかもそうなんですけど、漂着したごみとかを回収していただいているという取り組みがありますね。世間の人って、漁師さんをそういう風にやっていると思っていなくて、ごみを出す側、捨てる側と海にごみを流す側だと結構誤解している人は多いんですね。でも実際に私が清野先生に色んなご指導をいただきながら漁師さんに話を聞くと、日本の漁師さんは海にごみを捨てるというのは自分で自分の首を絞めるような事に本当につながっているので、そういう事をやっている人というのは本当に少なくてむしろ対馬の漁師さんは、逆にその今のマイナスの状況をプラスに、漁業だけじゃなくてごみを収集したりしてそういう取り組みをして、プラスに持って行く活動。経費をもらっているのでタダでやっている、ボランティアでやっている訳じゃなくあくまで経費をお支払いしているという形なのでそういう意味では、漁業者が海の環境保全に対してすごくプラス側に活動しているという事をですね、もっともっと逆にアピールして良いんじゃないかと思っていまして、そういう形を取っている漁業者の方たちをもっとアピールしたら、実は対馬の漁業ってごみを流しているんじゃなくてごみを集めていてきれいにしていて、そういう漁師さんが獲った魚なんだよという。そういう環境にプラスの活動をしている漁師さんが獲った魚なんだよみたいなイメージアップみたいな事につながれば、ごみに付加価値をつける事は出来ないんですけれど、漁師さんだけじゃないと思うんですけど、そういった活動をやっている方が生み出す魚とかですね、そういう製品に何か付加価値を付けれるんじゃないかなと思いますし、後は海ごみの中にはプラスチックがあってポリタンクとかはマテリアルリサイクルとかされているし、そういった方向性が見つかりつつあるのでそれはぜひ続けていただきたいと思うんですけれども、中々難しいのは漁網。我々もつい昨年の８月に対馬市の方にお願いして処分場を見に行きましたけれども、やっぱりそのままちょっと切って捨てているだけのような、中々やっぱりあれは持続的な処分方法とは言えないので、安いのは安いんですけど環境にとってはプラスかマイナスかというとそんなに良い事ではないので、あれをどう片づけるかというようなところもあります。だから課題として残っている漁網の件につきましては、またこの委員会だけではなくて大学としてやっている研究の技術開発とかその辺からも何かお手伝い出来る事があるんじゃないかと思って検討しているところですね。また今後とも引き続きよろしくお願いしますという事で私からの意見とさせていただきます。どうもありがとうございました。

清野副委員長：ありがとうございました。事務局様から方いかがでしょうか。

運営(上野)：ありがとうございます。大変貴重なご意見をありがとうございます。本当に今漁協が何年も回収されているその回収の速さとか分別の速さとかですね、どこに出しても自慢できるくらいの専門チームと言って良いくらいのですね。すごい皆さん感動されるくらいですね、重機使ったり船使ったりして、されています。本当にいつの間にやったのというくらいの事をやってしまう、その全国大会があったらダントツで優勝する位のですね。しかもそういうところが今仰られた様においしい魚を、意識が高い人たちが作っているという事で、今日残念だなぁ宮﨑組合長。青年部の方も来ているので。それも料理しながらですね。自分の親戚とか同級生も漁師やっていますし、そういう事もぜひ進めていって最終的にやっぱり先生が仰った様に、僕らがいつも言っている様に、海のごみを山にと、最終処分場にというのはとても悲しいので、そういうのも今後も持続しながらですね、なるべくそういうのも減らしていきながらこの色んな意味の付加価値があるんですけど、そういった形で活動していきたいと思います。大変貴重なご意見ありがとうございます。

清野副委員長：ありがとうございました。ではお気をつけて。中山先生の研究から色々漁具の環境政策をまたバージョンアップするというのが始まっているので引き続き対馬の方をよろしくお願いいたします。丁度今、漁業の話が出ましたけれども、いかがでしょうか。

田口様：美津島町漁協の田口と申します。組合長が所用で出席出来ないので代理で出席させていただいています。先ほどちょっと話がありましたように、漁網とかですねロープというのは漁業者さんが漁協の方にですね、航海中にこのまま漂流したままだと危ないので回収されたりですね。実際にペラに巻いて航行出来なくなって僚船で漁協に着岸後、回収作業して漁協で預かってまた市の方に処分をお願いしているような状況です。なので漂流ごみですね、これに対してもう少し、漂着ごみだと回収が簡単なんですけど、漂流に関しては色々調整しながら回収しないと難しいという事があるので、この辺もちょっと今後協力体制を作っていけたらと考えています。

清野副委員長：ありがとうございます。漂流ごみは洋上に出ている課題ですから、目撃したり或いは本当に残念ながらペラに絡まるとかで体験されたりだと思うんですけども、それは先ほどの保安庁様の話もそうですし漁師さんからも何か実態というか、相当危険な事ですし洋上で漂流するだけじゃなくて、漁師さんは自分でそれを取ろうと思って海に入って潜ってペラの所をカッターで網を切ってとか、もうめちゃくちゃ危険な状況になっていてもっと知られて良いかもしれないんですが。

田口様：漂流の場合はですね、そのまま放置した後にどうしても漂着してまた海岸にこの後着いて、絡まってその後漂着ごみを漁協の方でも回収をしていますけどものすごく取り辛いんですよね、漁網ロープというのは。絡みついて深い所の瀬に入ったりとかして、その後、海藻類とかですね貝類とかにも影響が出るので、出来るだけ漂着する前に回収出来るようになった方が漂着前のごみですので、その辺の回収作業も色んな方法で共有出来たらとは思っておりますけども。

清野副委員長：ありがとうございます。今日そういう形で委員さんからの漂流ごみについての話もいただきましたので、ぜひそういった実態をですね来年度に向けてヒアリングしていただいたり、データになっていないと見えないところもあったかもしれないですね。そういう点では、ぜひいつ何処でどんな状況みたいなものが分かればと思いました。貴重なご発言ありがとうございました。それではですね、議事に戻りまして後半に参ります。議題の３番になります。対馬市海岸漂着物対策推進行動計画の見直しについて案という事でお願いいたします。

運営(山内)：対馬CAPPAの山内と申します。よろしくお願いします。議題３の対馬市海岸漂着物対策推進行動計画の見直しについて、（提案）ということで説明をしたいと思います。この行動計画なんですけども、背景としては平成21年７月に国の方で海岸漂着物処理推進法という法律が出来ております。それに基づいて長崎県の方で海岸漂着物対策推進計画という計画が立てられております。その後対馬市においては、当時の環境政策課さんまた、このような協議会の推進委員さんがおられたと思うんですけど、そういった方々のご協力の元、対馬市海岸漂着物対策推進行動計画というものが出来ております。これについては、ページで言えば45ページから巻末資料１という事で約50ページ位あります。これは全編付けていますので、この協議会で細かくは説明は出来ないものですから、時間がある時に一通り目を通していただければと思います。それでこちらの方で提案と言いますか、この行動計画が立てられて10年近く経過するという事もありまして、当時の背景も記載されているという事で今の現状に合わせた方が良いんじゃないかという事で見直しを提案するという形にしています。38ページに主な見直し内容という事で４つ挙げてはいますけど、これは私が個人的に全体を読んで気付いた点を書いていますので、もしかしたらまだ細かく出て来る可能性はあります。見直し内容としては、①に漂着ごみ等の円滑な処理の推進という事で、以前は島外処理ですね。北九州の方に運んでいたという記載もあります。現在は島内処理の実施をされています。主にクリーンセンターの中部中継所の方で色々処理をされている現状がありますので、そういったところを記載した方がという事で挙げています。もう一点、油化装置の稼働記載という事なんですけど、これは数年前にもう廃止をしている現状もありますので、それに変わる発泡スチロールのリサイクルとか、廃プラ系のですねリサイクル等とかも稼働しているところもありますので、その辺は見直しというか記載を書いた方が良いんじゃないかという事で挙げています。2番目が今の①にも関連はするんですけども、効果的な発生抑制という事で、３Rの推進による循環型社会の形成について、２番目に発泡スチロール等のマイクロプラスチックが漂着している現状と対馬市さんが取り組んでいる対策とか課題の記載をすべきじゃないかと思います。３番目に多様な主体の適切な役割分担と連携の確保という事で、当時の行動計画の中には、旧NPO団体の名称がそのまま入っています。例えば、当時活動をしていたNPO法人対馬の底力とか対馬CAPPAの前身にはなりますけど、美しい海のネットワークという名称があります。既に解散したり活動を休止している団体等の名称もありますので、この辺は変えるべきじゃないかと考えています。最後に４番目として、国際連携の確保及び国際協力の推進という事で、27年当時はそんなに活発ではなかったと思うんですけど、対馬高校の国際文化交流科とか、部活動でユネスコスクール部というのが出来ているんですけども、高校生が結構韓国の学生とか交流をしたり、海ごみ問題、また海ごみ以外に環境活動等もされていますので、その辺の記載も必要じゃないかと思います。後は対馬市さんの方についてもSDGｓ推進における漂着物、また水産資源海洋保全等の色んな目標を立てられていますので、その目標とか計画に沿って見直しを進めていけばという事で今回提案をさせていただいています。ただ、環境政策課さんの方もですね、色々予算とかスケジュールとか、来年度以降の事になりますので今回は提案という形で議題に挙げてもらいました。以上になります。

清野副委員長：ありがとうございました。それでは委員の皆さまいかがでしょうか。

川口委員：この推進行動計画の見直しというところが、今回の第３回ではかなり肝になる議題なのかなと拝見しています。この平成27年に作られたという事で、この時代にこれだけ分厚い行動計画が出来ているというところがまず誇るべきところだなと思うんですけれども、前提として伺いたいんですが、この行動計画というものは一度作られたらそれが何年間の計画だとか、何年に1度見直すとかそういったものは計画策定当時に設定されているものなんでしょうか。

清野副委員長：では事務局さんはいかがでしょうか。

運営(末永)：具体的に何年に1度見直すという事は、決められておりません。但しよくありますけども、国の計画、それから県の計画が変わった段階で、上位計画が変われば下の方もそれに沿って見直すという風になっておりますが、具体的に何年毎に見直すという事の記載は無かったと記憶しております。

川口委員：ありがとうございます。本当に刻一刻と状況が変わっていくし、恐らくこの10年の間に流れて来る量だったりとかその組成というものも変化していると思うので、この上位計画がどうであるかに関わらずやっぱりこの一番現場に近い課題の中心地である対馬ではその実情に合わせて見直していくというところがすごく大事な事だと思うし、現場にある計画だからこそ状況に合わせて結構フレキシブルに変えていくというそのPDCAを回す事が出来る計画になると思うので、ぜひ何年に１回見直すみたいなところと、その見直しの際に検討材料になるモニタリングの調査の結果があるという事もすごく強みだと思うので、そういった年に４回もやっているモニタリング結果をどういう風に使ってどうやって見直していくかみたいなそういう部分の事を前段に盛り込んだ方がこの計画の重みがすごい出て来るのかなという風に感じています。以上です。

清野副員長：事務局さんいかがでしょうか。

運営(上野)：貴重なご意見ありがとうございます。私どももモニタリングの報告は毎年行っているんですけども、この改善に関しては本当に行き届かないところがあってですね。やっとこれを見直して、今川口さんが仰った様に現場から変えていくという、戦っていくといいますか、そういうのは本当に貴重だと思っております。今山内が言ったようにですね、この行動計画に基づいてずっとやっては来たんですけど、全体的な見直しはですねやって来なかったという事で今後はやっぱり仰った様に１年毎ないし２年毎でもですね私たちの方から意見を言ってですね。現場ではやっぱりちょっとなと思う時はあるんですよね。モニタリング調査の内容もですねこれは対馬に合ってないなと。これは湘南だったら合っているけど、対馬で５センチ位の流木を集めるのはちょっとと。そういうのを変える力が僕らにもいると思っているんですけど、そういういい意味で今ご意見いただいたように今後はそういうのを変えていきながらモニタリングとか、そういう計画をですね。今例えば上槻とか青海とかはですね、現地の人たちに手伝ってもらっているので結構そういう事を一緒に調べていきましょうという形で協力してもらえる体制も出来てきたので、これからはこっちから意見を出して市役所の方々に戦ってもらって変えていけるぐらいのですね。対馬はこうなんだと。中央ではこうだけど対馬はこうなんだと一番多い所では。それが今度モデルケースになって例えば五島とか沖縄にもいくケースもあると思うので、仰った様に努力していきたいと思います。ありがとうございます。

事務局(阿比留)：ありがとうございます。この行動計画もですね、対馬市の計画になりますので、この計画をまた一から策定しようとなるとまず数百万円の予算が必要となってくるという事になりますので。プラス先ほど回答のあった通りですね、何年に１回改変しないといけないという風なことでもない様であれば、少し前、内容をですね皆さんの意見も参考にさせていただきながら、部分部分を今の現状に合わせていけば良いだけの見直しで良いのか、若しくは一から全部見直した方が良いよねという風な事であればまた改めて予算取りも必要になってくるかもしれませんので、その辺りを部内でもですね、協議した上でまた皆さんの意見を参考にさせていただきながら、この行動計画の見直しにつきましては協議をして皆さんに回答したいと思います。以上でございます。

犬束委員：数件あるんですけど、海ごみの現状を伝える番組が制作されているという16ページに記載があって、あまりそれが授業等でしか使われていなかったみたいなことがあったと思います。その番組って民間でも見せてもらえたりするんですかねというのが１点と、そしてそれを有線テレビ等で流す、何かその海ごみの現状だよというところで茶の間にいて市民の方が海ごみを可視化できる、どれだけ海ごみがたくさんあるかというのは中々一般の市民の方は知らないんじゃないかなと思うんですよね。では知ってもらうきっかけにその番組を上手に使うというところはいかがかなと思う事があります。それから日韓の海ごみの交流会を高校生とかがされた、学生さんとされたというところも有りだと思うんですけど、例えば漁業者の中で、すごく海ごみに対して意識が高い人たちと韓国の海ごみに対して意識が高い漁業者同士の交流会もあっていいんじゃないかなと。それも有りと思います。こういう風に漁業をすると、あなご籠についても、よくあなご籠が海岸に行くと落ちているけど、あれは漂着しているのは日本のものじゃなくて韓国のものが多い。では漁業者同士で、いやこういうものを使うとここはこうなんだよとか、のり養殖業者と日本ののり養殖業者と会わせてすると、今頃そういうポリタンクに入っているものを使うのはナンセンスだよという様な話が出来るんじゃないかなと思うので、そういう事も有りじゃないかなと思います。ちょっと長くなって良いですかすいません。海ごみ×企業はリサイクルだったりとか経済活動につながったりするんですけど、海ごみ×高校生とか学生は先ほど仰った様に環境意識の高い人づくり。では海ごみ×私たち家庭の家事をこなす主婦とかとすると、家庭から出るごみだったりそれから目に見えないごみ。海ごみ海ごみと言って、皆さん目に見えるごみだけを海ごみと言うけど、生活排水から流れていく海ごみだってある訳でして、そういうところで、海ごみ×農業にしたら肥料の袋が風に飛んで行って海にこんなにあるんだよというところ。海ごみ×ブルーツーリズムだったら旅行のコンテンツの一つとしてそれを売りにするとか、海ごみ×映画、かっこいい映画を撮るんですよ。対馬はこんなに海ごみが来ているけど漁師さん達がその海ごみを回収してやってますよみたいなところを撮ると、これってまた経済効果もあって良いんじゃないかなとか。海ごみ×林業とか海ごみ×何とかと持ってくる事で、色んなですね活動が出来て、そして経済が回ってこれは一つのビジネスにもなって注目をもっと浴びてというそのマイナスの面のネガティブな海ごみがポジティブなものに変わるという仕組みづくりもあって良いんじゃないかなと思いました。

清野副員長：ありがとうございます。海ごみ自体はどんどん来てしまうけど、それをどうやってポジティブな、そして対馬に活かしていただくかというご紹介をしていただきました。いかがでしょうか。

運営(末永)：ありがとうございます。一般の方の普及啓発という事で、作成した番組についてはケーブルテレビで放映をしたいという風には思っておりますので、後で調整をいたします。作成はできておりますので、見れるようには出来ればと思っております。それから今日ご欠席ですが、宮﨑組合長の方も仰っていた漁業者同士の交流というのも非常に重要だと考えておりますし、前回、前々回ですかね協議会の中でもそれは対馬市の環境政策課様の方もそういった事には予算が出るのではないかというお話もありましたので、掛け算の部分ですね、そういったところも考えていきたいと思っております。それから私事になるのですが、私の方が対馬市森づくりの協議会という事で、農林しいたけ課がやられているところの委員をしておりまして、伐採計画の見直しが昨年１年間に渡ってやられていて今年も１月で終わったんですけど、その中にもやはり山から出る木材についての処分のやり方、間伐した後、そういったところの明確な記載、海ごみにならないようにどういった土場に置くかとかいう色んなそういったところの記載をしていただきました。全く山の事には詳しくなないのですが、そういった事もございますので、やはり掛け算というのは非常に大事な事だと思いますし、山の事を聞いているとやはり皆さんは本当に猪、鹿の問題を最重要視されています。間伐で伐採しているからという事ではなくて、猪、鹿が非常に多いから困っているんだというところでした。実際そこを根本的に解決していかないと、やっぱり海ごみも流れるというかですね、裸の山からはやっぱり灌木も流れて来るだろうなという風に素人なりにも分かるので、その辺も協力してやっていきたいと思いますので、また色んな専門家の方々に知見をいただいてご協力をしていただきながらその掛け算の部分ですね、そういったところにも取り組みを本格化していただければと思います。

清野副員長：ありがとうございました。他にいかがでしょうか。そうしましたら議事の４の話もしていただいて、行動計画の見直しと今後についてもお話していただきましょうか。それでは次の議事に移りたいと思います。４番目、令和６年度の取り組みについて案という事でお願いいたします。

運営(山内)：議事４の令和６年度の取り組みについて案という事で説明します。令和６年度も今の議題に上がった対馬市海岸漂着物対策推進行動計画の内容に基づき色んな事業のメニューに基づき、事業を継続していきたいと思います。主にですね、中間支援組織の私たちの活動の工程表とか後のページには付けているんですけども、まず今現場とかで課題というか、これはこうすべき目標じゃないかという事で５点ほど挙げております。まず１番目に島内の漁業従事者が回収する海ごみの回収量はほぼ横ばいの状態で、今後対馬の漁業従事者の高齢化、人口減少により海ごみの回収が困難になる事が予想されるという事で記載はしていますけど、現実にですねモニタリング調査で色んな地区に行くんですけども、市役所の環境政策課の海ごみ回収事業等を地区に依頼をされているんですが、どうしても高齢化とか人口が少なくなっているという事で今回はしていないよという地区が何か所かありました。それでちょっとやれないという事でそのままの状態という所もありましたので、その辺は中々難しいところがあります。２番目に圧倒的な海ごみが押し寄せる対馬の現場において、回収ボランティア作業を体験し、海ごみ授業、島内視察等を行う企業、学校の研修旅行は年々増加傾向にあることから、さらなる普及啓発と対馬型環境授業活動の拡充を図る。これは過年度から継続している活動ではありますけども、将来的に廃校になっている施設等に海ごみの展示とか色々、そういったものを学習出来る施設をですね、有効利用をさせていただきたいという目標を挙げています。３番目に回収だけでなく、海ごみ(廃プラ・流木など)に付加価値をつけ、リサイクル資源として商品を生み出す仕組みを官民共同で構築する。具体的には廃プラからレジかごとかごみ袋とか色々もう商品化しているものはございますけど、その仕組みをさらに構築していきたいという事で目標を挙げています。４番目に③に関連し海ごみは対馬にとって、ネガティブな要素であるけども取り組み次第では対馬が好転するきっかけを持っています。循環経済を活性化させ段階的に漂着する海ごみの回収と発生抑制を目指し、対馬の美しい海(海岸)を取り戻していくという事を目標に挙げています。最後には普及啓発に関連して、令和６年度開催予定の日米韓海ごみシンポジウムがありますので、そのシンポジウムの中で世界中の全ての人々に向けて、海ごみ問題解決の国際的協力を呼びかけ、対馬から世界を巻き込んで海ごみ問題解決を目指していくという結構大きな目標で挙げています。次の40ページは、６年度の対馬市海岸漂着物対策普及啓発活動メニューと実施目標という事で１番から９番まで挙げています。目標人数につきましては、先ほどの令和５年度の活動報告の数字に見合う形で目標数値を挙げています。それから42ページ、43ページの方ですけど、これは令和６年度の中間支援組織、私たち対馬CAPPAの年間事業工程表(案)という事で挙げております。主な活動内容を記載しております。その中には当然この行動計画に基づいていますので、協議会運営とかモニタリング調査、トランクミュージアムの運営とか海岸清掃のボランティア受け入れ、それから環境スタディの運営とか、マスコミ対応という考えられる内容で記載をしています。一応日付ですね、予定とか書いてますけどこれは年間通して行う事業と、定期的に行う事業という事で大体のスケジュールを。当然入札等でもしかしたらこの事業は出来ないものもあるかもしれませんけども、ある程度対馬CAPPAの活動としてはこういったものを行いますという事でご理解いただければと思います。以上になります。

清野副員長：ありがとうございます。それでは委員の皆さんご意見いかがでしょうか。

事務局(阿比留)：39ページのですね３番と４番に関する事で、皆さま昨年海ごみシンポジウムの時にお話がありました、対馬モデルという事で海ごみをリサイクルしていて、先ほど説明にもあった通りですね、買い物かごになったりとか海のレジャーボックスになったりとかいう風な事で、色々とそういう風な活動をSDGｓ推進課と共にですねやっております。そこで今、関西経済同友会様、それからBOIと言いましてブルーオーシャンイニシアチブ様、それから関西再資源ネットワークという風なところと一緒にですね、対馬モデルという名の元にこの海ごみをリサイクル、富に変えていくようなそういう構想を持って、それをまた来る25年には大阪万博の方でですね情報発信していこうという風な目標を持ちながら取り組みを進めているところでございます。それに関しましてですね、実は去る１月22日にこれに関する地元の会社が立ち上がりまして、株式会社ブルーオーシャン対馬という名前なんですけども、ここの社長がですね本日いらっしゃっている川口幹子様がそこの社長に就任していただいておりますので、川口さんの方からまたご説明していただければと思います。

川口委員：今ご説明にありました通り、１月22日に株式会社ブルーオーシャン対馬というのが設立いたしました。こちらに関しては、海ごみだけではなくて海ごみを資源に変えていくという様な事をしっかりと持続的にやるという様なところを考えた時に、海ごみだけでは到底量が足りないんですね。という事で、島ごみ、産業廃棄物も含め、一般廃棄物も含め、そういう対馬全体のごみを資源に変えるというところを目標にしてやっていくわけなんですけれども、具体的なですねそういうフローとかそういったものは、関西再資源ネットワークというですね、大阪で再処理の方をやっている会社と連携しながらやっていくんですが、どうしてもやっぱり対馬の漂着ごみの現状だったりとかそれに対する地元の方が今どういう風にここまで取り組んで来たかとか、そういった経緯を知っていてそこをちゃんと事業計画にインプット出来る人が必要だろうという事で私がですね、お飾り社長なんですけれども任命される事になりました。私自身がそういった再処理というようなところに関して専門的な知識を持っている訳でもないので、私に期待されている役目というのはこの場で長年話し合われてきたような現状をどう伝えていくかというような事だったりとか、地元の足並みと揃わないようなところを調整していくとか、そういったところが多分に私に求められている役割なんじゃないかなと思ってお引き受けする事にいたしました。なのでですね、私がやっぱり心配しているのは、万博終わったら終わりみたいな事になるかも、社長の立場でこれを言っていいのか分からないんですけど、万博終わったらさようならみたいな感じになるのがすごく社長を引き受けながら危惧しているところでもあるんですね。そうならないようにするのがきっと私の役目で、そうならないようにするにはこの場で、新しく出来たブルーオーシャン対馬の動きをある意味監視してほしいというところがあります。監視しつつそこの事業計画の策定にこの会が関わってほしいという思いも私自身としては持っています。ですので、こういった行動計画の見直しについてがあると肝になるんじゃないかという話をさせていただきましたけれども、そういった中にですね、今どれだけのごみがやってきていてそれをどうしていくかという様なところを技術を持っているところと地元でちゃんとモニタリングをしているところというのをつなぐ場がこの会であったら望ましいなという風にすごく思っているんですね。前段で小島委員が言われた様に、もう一つ危惧しているところとして、漂着ごみが万博という一つのステップの中でグリーンウォッシュになってしまうというところも私の中で懸念の一つです。そこに関してなんですけれども、そこは関西再資源ネットワークの社長さんと色々ディスカッションする中で、そこをちゃんと精査して今後きちんと持続的にそれが資源として使えるような仕組みを入れていこうと。海ごみちょっと入れて環境に優しい商品になってますみたいなところを逆にブロックしていけるような役目もしていきたいなという風に私自身は思っているので、そういったブルーオーシャン対馬、新しく作った会社の動きというところもこの場で報告させていただく、そういう場を設けていただけたら嬉しいなと思っています。対馬モデルみたいなところの本当に具体的な話というところはまた別の機会にフローの図等をお見せしながら、私に出来る範囲でご説明させていただきたいなという風に思っていますけれども、すごくざっくり言うとペットボトルであるとか発泡スチロールというのはそのままマテリアルとしてのリサイクルが比較的スモールステップでいけると。だけど漂着ごみってそれだけじゃないでしょうというところがあるんですね。本当にリサイクルに適さないというのが大半を占める中で、それをギュッと圧縮して燃料に使うという様なところの仕組みを入れていきたいと思っています。なのでマテリアルリサイクルだけを考えちゃうとそのリサイクルしたところで海ごみ問題解決するんですかという、結局そこに行き着くんですけれども、サーマルとかケミカルがリサイクルという風なところに軸足をおくことで、要は全然リサイクルに適さないものというところの処理の出口を作っていくというところを結構対馬モデルの肝になるところなのかなという風に考えていますので、何かのタイミングで今この素材はこういう風にしていこうと思っていますみたいなフローもご紹介出来る機会がいただけたらなと思っています。以上です。

清野副員長：ありがとうございました。それについて、他の事も含めていかがでしょうか。私は今お話があった日経ブルーオーシャンの有識者会議の大学から出ている委員の一人なんですね。二人委員が出ていて、今度の２月２日に東京で、その日経ブルーオーシャンの会議があります。それで議題を見たらそういう資源循環についてと書いてあったので、もしかして対馬の事もあるのかなと思ったんですけども、私自身はそこの有識者会議のメンバーなのでやっぱりこういう海ごみみたいに非常にデリケートな問題だとか、後は廃棄物の色んな制度の事とか、時代の変わり目の事とかがあるのでそれを経済間頑張ってくれるという事は良いと思うんですけども、もうちょっと開かれた議論にすべきだという事を言っているのと、対馬はものすごくボトムアップというそれを踏みながらやってきたので、そこをどうするのかというのは私自身は２月２日の会議で発言するつもりです。やっぱり教科書的に資源開発と地元の関係とか、資本と地元の関係とか割と過去繰り返されてきた資本と現場という問題が今度は起きないようにしなくちゃいけないという事と、20世紀までのそういうやり方と今みたいに市民社会とかボトムアップとかそういう枠組みの中で、SDGｓでやっている訳だから、そこはSDGｓの時代に理念を整理すべきという話はしたいという風に思っています。ですから私はそちらの方で色々聞いている中で、東京のすごいシャンデリアとかある所の会議場でそういう話が行われていて、対馬に、現場に行くと寒風が吹く中でみんなごみを拾っていて、何かこのギャップというのをどういう風に捉えて良いか分からないというのがあるので、そこに経済界の方も資本と地元は何であったのかとか、今南北問題とかグローバルサウスとか言われる中で海ごみもまた世界的にもそういう議論の中にあって、だからこそ国際的にプラスチック革命みたいのをもっとボトムで起こそうとかいう風になっているので、そういうところを整理をさせていただきたいなと思っています。だからこの議長としてではなくて、学識というかそういうところでの情報提供とそれから議長としてのお願いで言うとですね、私この会議が本当にある摩擦をどう調整するかというすごい大変な時から入らせていただいているので、本当に外から見たらもっと早く進めればいいのにというところ、本当に何か繕い物をするように市も地元もあらゆるステークホルダーがやってきたという事があるのでそこはきちんとやっぱり伝えていただきたいし、川口さんがそういうインタープリターというようなお役目を果たされているとしたらそういうところも十分ご理解いただいた方が良いかなという風に思っているところです。だから関西とか東京の思う速度と、現場の気持ちとというのをどういう風に合わせるかというのがあるので結構チャレンジングな話だと思いますので、その間に挟まって川口さんが潰れないように。私は川口さん自身も大事な人材だと思っているので、そういう事も含めてやっぱり対馬のあらゆる今日話に出た、市民の方、行政の方、漁師さん、集落の方、本当にすごいそういう中でやっているので中々上手く言えないですけど、何とかこの新しい流れにですね、一緒にやりつつやっぱり対馬のベースをという風に思ったところです。ちょっと言い過ぎてすいません。

事務局(阿比留)：今現在CAPPAさんの活動内容が主なこの議題の中にあっておりましたけども、今後はこの３番４番、それから５番のところは環境政策課が直接携わるところでございますので、環境政策課がSDGｓ推進課と共にやっている事とか、先ほどのブルーオーシャン対馬さんと一緒にやっている事も情報提供をこの協議会の中ででもですね、入れて皆さんに情報を共有させていただきたいと思いますので、そのような形で進めさせていただきたいと思います。

清野副員長：ありがとうございます。私もそういう意味で今課長さんに仰っていただいて良かったなと思いまして、やっぱり新聞で知るとかじゃなくて地元の方が事前情報を持っていて参加出来ると良いかなと思ってきたので、どうしてもそういう速度が速かったのでまたSDGｓの推進の方にも、私と川口さんも、上野さんも入っていると思うんですけど、そこで聞いたものをまた本当に対馬の海ごみと奮闘する住民の方とかの所にもお届けしたいなと思ってきたので、ぜひですね今仰っていただいた様に阿比留課長の方でたくさんの案件で大変だと思うんですけども、お願いできればと思うところです。後、これは委員としての意見ですけど、せっかく色んな課の方が来てらっしゃるので、SDGｓ推進課にはそれだけ目玉政策にするならどういう風に議論されているかをリアルタイムに３時間取ってここに来てもらいたいなというのが希望です。だからちょっとそれをお伝えいただいて、資料で読むよりも雰囲気が分かると思うんですよね。だからそこはSDGｓ推進課もめちゃくちゃ忙しいのも私は見ているんですけど、資料を読むより来てくれた方が早いよという風に言っていただけたらと思いますのでよろしくお願いします。

事務局(福島)：実はそのSDGｓ推進課、以前はSDGｓ推進室だったんですけども、今は課になっております。それで今はこの会の中に課長は入っておりませんけども、その話を実は下話を少ししておりまして来年度くらいからこの会議に課長として、委員として出席していただけないかなという話は今少し下話をしております。来年はぜひここに入っていただけたらなという風には思っております。以上でございます。

清野副員長：ありがとうございます。せっかくそういう形でですね、色んな良い政策が、対馬の中で環境についてもSDGｓについても進んでおられますのでぜひこの協議会でそういう場が出来たらと思います。色々会議へのご尽力ありがとうございます。他にいかがでしょうか。小島さん何か全国的な動きとかも今、激流の時代に入っているという一方でごみが全然減らない解決し辛い問題もありますがいかがでしょう。

小島委員：今、川口さんと清野先生とか委員の方からのお話については私もずっと感じてた懸念事項、万博とか海ごみブームで対馬が翻弄されてつまみ食いされてこのままブームが去ったらごみだけ残ったみたいな事に絶対になってほしくないので、その辺はすごく危惧もされているからこそこういう場で皆さんに情報共有されているんだと思いますけれども、外の人は分からないのでお前ら一回拾いに来いよと。それはいつも思います。ちょっと口が悪くてすいません。結局ごみをリサイクルするのって、リサイクルの素になるごみが出続ける。ごみの素の安定供給というのが前提になっているので、本当は海のごみは無くなったら、材料が無ければもうリサイクルなんかする必要がないわけですよね。その手法がマテリアルであれ、ケミカルであれ。ですからあんまり中期的ぐらいのスパンで考えるんじゃなくて元々目指すのはどこなのか。ごみを無くしていくんだぞと。やっぱり循環型経済の中で出さない、ごみを生まないというところをもっと押していかないとそこは前田さんたちの課とかで一生懸命されているんだと思うんですけど、同じような事を色んな所で議論されている事がどこかで風通しを良くしていかないと他所の理論にガガガっと引っ張られるような事って往々にしてあるじゃないですか。私は対馬の住民ではないですけど、この場所がすごく好きで本来の美しい自然とかおいしい水産品とかそれがごみでこんなに損なわれちゃっている。とても残念で、せっかく海洋ごみの問題にそこまで世界中が注目しているという時に、何か一過性のところに翻弄されて皆さん疲弊していくような事だけは申し訳ないと思うので、まずは繰り返しになりますけど風通し良くという事と、やっぱり早い段階でここがちょっと気になるんだけどとうい事があったらお互いにそれを開いていくっていう事だと思いますので、現状を知らない人が何か訳知りに言ったら、一回拾いに行ったら分かるよって海岸に置いてきちゃうとかですね。それくらいやっても良いかもしれないと思います。

運営(上野)：ありがとうございます。企業とかそういった事に乗り出してきてくれて問題解決にというありがたいんですけど、代表としてはですね、今小島さんとか仰っていただいた様に課題と足元のやっぱりちょこっとずつの色んな課題。やっぱり住民にそこに住んでほしいとかですね、もうちょっとアイデンティティを持ってやってほしいとか色々ありながらの事なので、それをSDGｓの関連から前田さんも色々考えてあるとは思うんですけど、新しいものに変えていってイノベーションを起こしてという中でのバランスをこの僕らが今までやってきた事とですね。川口さんもですね、この前(弊社に)来た時に大変だなと、誰かを置かなきゃ向こうもあれなので現場の人をね。そういう中でやるという事なので、課題とその解決に向けた過程を一気にやってほしいのと、やっぱりここで暮らしているさっき犬束さんが仰った様にあれは良いと思いますよ。漁師が汗かいているのを動画にしてね、頑張っているその人たちが魚を作っているとかそういうのもやりながら解決していくという事が大事だと思います。前いらっしゃったNUSのこれ(協議会)を立ち上げる時からいらした佐藤さんも本来はそういう形が良いんだと。現場でやっていく事でこういうものを残してくれたというのもあってですね、その流れにやってきたんで僕らもブルーオーシャン対馬が出来た時にそう感じながらですね、何とかバランスを取りながらと思っていたんですけど、いよいよそういう会社が出来るという事で今仰ってもらったような事を僕らも感じている。そこのところは僕らもバランスを考えて25年になくならないように引き続き発信していくという役割を続けられたらなと思います。

清野副員長：ありがとうございました。この協議会でざっくばらんに色んな議論が出来る場があるというのと、協議の場をずっと持って続けられてきたという対馬市の皆さんの力だなと思いますので、新たな時代が来てもそういう事で話し合っていけたらと思います。

森委員：6年度もこのようにずっと継続して推進協議会を運営されていくと思うんですけれども、この2年間３年間参加させていただいていて、よく皆さんが仰ってあったのが海と山はつながっていると、もちろん海の関係者の方々も例えば漁協の方とか委員で入ってらっしゃるんですけれども、森林とか山の関係の方がこの協議会の委員をして加入する事についてどうなんですかみたいな話が何度か挙がってきていたと思うんです。それについての今のところその検討状況だったり、主な見込みとかあるいは方針とか、もう入れないという事に決めたという話なのか、いやまだ検討しているという事なのかそこら辺の状況をもしよろしかったら一つ確認させていただければと思って、事務局に質問したいと思います。

清野副員長：ありがとうございます。いかがでしょうか。森の関係ですね。

事務局(阿比留)：ありがとうございます。この森林関係の方々がこの委員の中に入られては如何かという風なことでございますけども、確かにですね森、川、海がつながっておりますのでそういった方々を委員の交代時期にですねまたこちらの方としても、想定しながら委員のメンバーを決めていきたいと思いますので、積極的に入れていくような形で進めていきたいと思います。

清野副員長：ありがとうございます。最初の頃入っていたような気がするんですよね。第一期の頃かな。また確認いただいて、あと物理的にすごい流木下りて来るので。結構すごいですよね。それであまりにすごくてどの位の量が下りて来たのかというのを、多分２年位前に伺った時に把握できない位下りて来ていて、浅茅湾とか色んな被害が、いかだとかあるんですけど、どうせ来てくれないからと事業者さんが自分で直しましたとか言っていて、被害額が算定出来ないみたいな事があって、そういう意味では森の方もお困りになようですし、そういうところに出てきていただければ、責めるとかではなくて一緒に考える事も出来るのかなと思っているところです。ちょっと情報提供になりますけど、森林の問題、結構手詰まっている気配があったので対馬グローカル大学というのをやっているんですけど、そこでこの間の林野庁の九州農政局とも連携して、森林総合研究所ってあるんですけど、そこは林野庁の研究所ですね。国の研究所の、なんと官民連携企画官みたいな役職があって、たまたま私の大学の時の同級生がそういう役になっているのが分かって、今度また桜の研究もしているので来てもらって、林野庁は林野庁でもっとみんなが森の事に興味を持ってくれたらこんな事にならないのにと思っているらしいので、そういう事でぜひこの協議会を核に何かそれぞれもっと分かってほしいとか、ごみもそうだし山もそうみたいなので出来ればと思っております。多分港湾管理者とか養殖の事業者とか本当に手出しで処理していたりとか土木管理者もそうですし、もう言っても無駄と思っているらしいのでもっと言っていく。数字にしたら誰かが防災とかね、色んな予算を投入できるので何とかしましょうという事と、林野庁だけじゃなくて砂防部、国交省の砂防の方にも結構今そういう事で流木の問題とか土砂崩れのそういう森林の処理の事があるので、そこもちょっと国交省の砂防部と。対馬は相当危機的というのが有名になっているのが分かったので、地元にもっと来てもらってごみも拾い、流木も見てもらおうと思いますので、今のようなお声ありがとうございます。対馬は長い中ですごくインフラの現場の方は流木の問題を片づけられなくて困っているとか聞くので、そういうのも県の振興局の方でも情報提供を集めていただけたらと思います。私の不手際で５分程押してしまいました。全体を通じての質疑応答というのも先ほどの計画についての事で充当のようになったかと思います。それでは私の方はここの４番の質疑応答までかと思います。私の役目はここで終わりますけれども、皆さま本当に熱心な議論をありがとうございました。これからも協議会をよろしくお願いいたします。

事務局(福島)：それでは清野副委員長様、議長をありがとうございました。それでは続きまして、議事のその他の連絡事項ですが、こちらは特にないですね。それでは以上を持ちまして第３回対馬市海岸漂着物対策推進協議会を終了いたしたいと思います。皆さまどうもお疲れさまでございました。